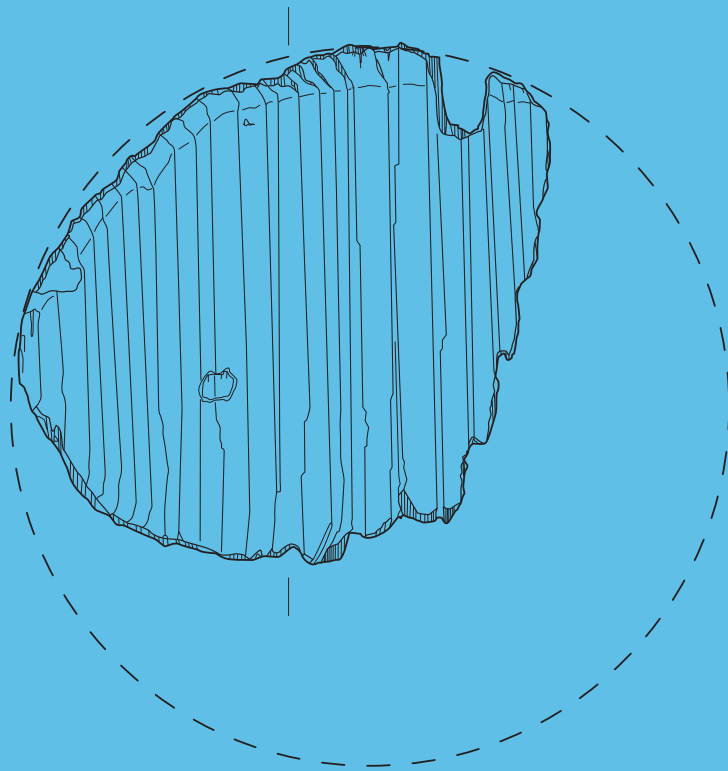


小 原 遺 跡

(第 19 地点第 3 次)

— 区画道路 6-39 号線道路改良及び流域関連下水道工事に
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —



2017

水戸市教育委員会

こ はら い せき 小 原 遺 跡

(第 19 地点第 3 次)

— 区画道路 6-39 号線道路改良及び流域関連下水道工事に
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

2 0 1 7

水 戸 市 教 育 委 員 会



遺跡全景（南西方向から）



遺跡全景（上方が東を指す）

ごあいさつ

水戸市は那珂川の流域に位置し、八溝山系の山並みと那珂川・千波湖の豊かな自然に囲まれています。私たちの祖先もこの豊かな環境のもと古くから生活を営んできました。

小原遺跡は、市街地の南東、旧常澄村域にあたる東前の台地上に位置し、この一帯には国指定史跡「大串貝塚」をはじめ、東前原遺跡、北屋敷古墳群、梶内遺跡、大串遺跡、椿山館など、縄文時代から中世に至るまでの多くの遺跡が分布しており、連綿とした人々の生活の営みを垣間見ることができます。

埋蔵文化財はその性格上、一度破壊されてしまうと二度と原状に復すことができないため、私たちが大切に保存しながら後世へと着実に伝えていかなければならない貴重な歴史的文化的文化遺産です。

東前町周辺では、近年の区画整理事業に伴い、都市化が進行し、周辺に位置する遺跡の様相も大きく様変わりしております。このような都市化と文化財保護の両立は、行政としても大きな課題として懸念されるところでありますが、本市においては埋蔵文化財の歴史的意義や重要性を踏まえ、文化財保護法並びに関係法令に基づき、保護保存に努めているところです。

このたび計画された小原遺跡内における道路改良及び下水道工事につきましては、文化財保護の観点から遺跡への影響を考慮し、開発部局と事前に十分な協議を重ねてまいりましたが、今回の計画によって遺跡の現状保存は困難であるとの結論に至り、次善の策として記録保存を目的とした発掘調査を実施することとなりました。

今回の調査では、平安時代の竪穴建物跡や近世の井戸跡等が検出されるとともに本市では未だ出土例の少ない木製品の曲物が発見されるなど、貴重な成果を得ることができました。

ここに刊行する本書をかけがえのない貴重な文化財に対する意識の高揚と学術研究等の資料として、広くご活用いただければ幸いです。

最後になりますが、今回の調査の実施に際し、多大なる御理解と御協力を賜りました地域住民の皆様と関係各位に心から御礼と感謝を申し上げます。

平成 29 年 3 月

水戸市教育委員会教育長 本多 清峰

例 言




1. 本書は、区画道路6－39号線道路改良及び流域関連下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、関東文化財振興会株式会社の調査支援を受け、水戸市教育委員会が主体となって実施した。
3. 調査の概要は下記の通りである。

所在地 茨城県水戸市東前町 1072-1 外3筆
調査面積 781㎡
調査期間 平成29年1月30日～平成29年3月18日
調査指導 米川暢敬（水戸市教育委員会事務局教育部歴史文化財課埋蔵文化財センター主幹）
調査支援 宮田和男・萩原宏季（関東文化財振興会株式会社）
調査参加者 大越慶子，大山晴美，川又恵美子，郡司ゆき子，佐久間憲子，
佐久間弘美，佐久間順美，高野正行，對馬むつみ，中井川肇，
平井百合子，藤倉秋之助，益子光江，山崎美知子
4. 本書の執筆・編集は、第1章第1節及び第2章第3節を水戸市教育委員会が、その他を水戸市教育委員会の指導を受けて宮田和男が担当している。
5. 遺物の写真撮影は宮田が行い、遺構・遺物図面のトレースは青木洋子・小川明子（関東文化財振興会株式会社）が行っている。
6. 調査組織は下記のとおりである。

水戸市教育委員会教育長 本多 清峰
事務局
七字 裕二 水戸市教育委員会事務局教育次長
長谷川 仁 同歴史文化課埋蔵文化財センター所長
米川 暢敬 同文化財主事（調査担当者）
太田有里乃 同主事
昆 志穂 同埋蔵文化財専門員
丸山優香里 同埋蔵文化財専門員
下山はる奈 同埋蔵文化財専門員
菅谷 瑛奈 同嘱託員（公開活用担当）
杉山 洋子 同嘱託員（庶務担当）
7. 発掘調査から本書の刊行に至るまで、下記の方々・諸機関より御教示・御協力を賜った。記して深く謝意を表す次第です（五十音順・敬称略）。

斎藤弘道，浅野啓介，青山俊明，荒井秀規，飯島一生，稲田健一，今尾文昭，
後藤一成，カワヒロ産業，古川登記測量事務所，茨城県教育庁文化課
8. 本調査における出土遺物および写真等は、水戸市教育委員会において保管している。

凡 例

1. 本書に記してある座標値は、世界測地系第IX系を用いている。方位は座標北を示す。
2. 本文中の色調表現は、『新版標準土色帖』2008年版（農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所指色票監修）を用いた。
3. 標高は海拔高である。
4. 掲載した図面の基本縮尺は、以下の通りである。
遺構図 調査区全体図 1/100
竪穴建物跡・溝跡・土坑 1/40・1/60・1/80
なお、変則的な縮尺を用いた場合には、スケールによりその縮尺率を表している。
遺物図 土器・石器 1/3
ただし、その種類や大きさにより異なる場合もあり、それらについては個々に縮尺をスケールで示した。
5. 遺物番号は本文、挿図、写真図版と一致する。
6. 遺構・遺物実測図中のスクリーントーンは、以下に示すとおりである。
 カマド火床面・焼土範囲  攪乱部範囲  須恵器断面
7. 本書中に用いた略記号は以下を示す。
S I：竪穴建物跡 S K：土坑 T P：テストピット K：攪乱
8. 遺物属性一覧に付した（）は復元値，〈〉は残存値である。
9. 遺物法量の計測値については、cm及びgで示した。
10. 「主軸」はカマドを持つ竪穴建物跡についてはカマドを通る軸線とし、他の遺構については、長軸（長径）とみなした。また、「主軸（長軸）方向」は、その主軸が座標北から見て、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した。（例 N -10° - W）
11. 計量表における「坏類」「甕類」は、遺物が小片であるため、坏（高坏）や甕（壺）のように器種を判断できなかったものを、まとめて計量している。また、判断できた遺物は独立させて項目を作っている。

目次

ごあいさつ

例言

凡例

目次

第1章 調査に至る経緯と経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 発掘作業の経過	1
第3節 調査の方法	2
第4節 基本層序	2
第2章 位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3節 小原遺跡における既住の調査	7
第3章 検出された遺構と遺物	13
第1節 奈良・平安時代の遺構と遺物	13
第2節 時期不明の遺構と遺物	16
第3節 遺構外出土遺物	25
第4章 総括	27
参考文献	
写真図版	
報告書抄録	
奥付	

挿図目次

第1図 基本層序図	2	第9図 第1号井戸跡出土遺物	17
第2図 小原遺跡と周辺遺跡の位置	4	第10図 第1号柱穴列	18
第3図 調査地点位置図	9	第11図 第1・2・4・5号土坑	20
第4図 小原遺跡遺構分布図	11	第12図 第1～5号ピット	22
第5図 第1号竪穴建物跡（1）	13	第13図 第1号性格不明遺構	23
第6図 第1号竪穴建物跡（2）掘り方	14	第14図 第1号性格不明遺構出土遺物	23
第7図 第1号竪穴建物跡出土遺物	15	第15図 遺構外出土遺物（表採）	25
第8図 第1号井戸跡	16	第16図 遺構外出土遺物（攪乱部）	25

表 目 次

第1表	小原遺跡周辺遺跡一覧表	5
第2表	小原遺跡における既往の調査一覧	8
第3表	第1号竪穴建物跡出土遺物属性一覧	15
第4表	第1号井戸跡出土遺物属性一覧	17
第5表	第1号性格不明遺構出土遺物属性一覧	24
第6表	遺構外出土遺物（表採）属性一覧	25
第7表	遺構外出土遺物（攪乱）属性一覧	25
第8表	出土遺物集計表	26

写真図版目次

図版1	第1号竪穴建物跡完掘状況(南方向から), 第1号竪穴建物跡掘方完掘状況(南方向から), 第1号竪穴建物跡土層断面(北方向から), 第1号柱穴列完掘状況(北方向から), 第1号柱穴列遺構確認状況(北方向から), 第1号柱穴列P3土層断面(東方向から), 第1号柱穴列P6土層断面(北方向から), 第1号井戸跡完掘状況(北方向から)
図版2	第1号井戸跡遺構確認状況(西方向から), 第1号性格不明遺構・第5号土坑完掘状況(東方向から), 第1号土坑完掘状況(南方向から), 第2号土坑完掘状況(北東方向から), 第4号土坑完掘状況(南東方向から), 第1・3調査区土層断面(北東方向から), 第2調査区土層断面(北西方向から), テストピット土層断面(南東方向から)
図版3	第1号竪穴建物跡出土遺物 No.1, 第1号性格不明遺構出土遺物 No.1～3, 第1井戸跡出土遺物 No.1
図版4	第1号性格不明遺構出土遺物 No.4・5, 表採遺物 No.1・2, 攪乱部出土遺物 No.1～3

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

平成28年4月13日付けで水戸市長高橋 靖（東前開発事務所扱）から、水戸市教育委員会（以下、市教委）教育長あて、埋蔵文化財の取扱いについて照会文書が提出された。照会地は周知の埋蔵文化財包蔵地「小原遺跡」内に該当しており、工事着手の60日前までに文化財保護法第94条第1項に基づく通知を茨城県教育委員会教育庁あて提出する必要があること、通知提出後に県教育委員会教育長から埋蔵文化財の取扱いについて通知があること、遺跡の発掘調査や現状保存を必要とする場合には、原因者の協力をお願いする旨回答した（平成28年4月26日付け教埋第422号）。

その後、平成28年8月16日及び9月2日に開発対象地内において試掘・確認調査を実施したところ、埋蔵文化財が確認された。この調査結果に基づき原因者である東前開発事務所と保存について協議を重ねたが、計画変更等は困難であることから、東前開発事務所から提出のあった文化財保護法第94条第1項に基づく通知に、記録保存を目的とした本発掘調査の実施が相当である旨、意見書を付して茨城県教育委員会（以下、県教委）教育長あて進達した。この通知に対し、県教委教育長から工事着手前に発掘調査を実施すること、調査の結果、重要な遺構が確認された場合には、その保存について別途協議する旨の指示・勧告があった（平成28年10月18日付け文第1784号）。市教委は工事対象地781㎡を調査対象地とし、平成29年1月30日から3月18日の期間に本発掘調査を実施した。

第2節 発掘作業の経過

発掘調査は、平成29年1月30日から平成29年3月18日まで実施した。整理作業は、平成29年3月20日から実施している。調査経過の概略は以下のとおりである。

平成29年1月30日より重機による表土掘削を開始する。掘削は調査区南側より行い、遺構確認面までの深度は地表面から約40cm～150cmである。また、調査区を横断する道路部分については、水戸市歴史文化財課・株式会社吉川建設との協議のもと表土掘削時期を延期し、その他の調査区域の発掘調査作業が終了した後に行うこととした。その結果、表土掘削作業の全工程は同年2月28日に終了した。なお、同日テストピットの掘削を行い、常総粘土層を確認したところで終了した。掘削深度は地表面から約220cmを測る。2月5日より調査補助員による遺構掘削調査を開始した。3月16日には遺構掘削調査をほぼ終了し、水戸市歴史文化財課による調査終了の立ち合い検査を行った。また、同日ラジコンヘリコプターによる調査区全景写真の撮影を行った。その後、図面作成作業等を行い、3月18日に現地における全ての調査を終了した。なお、調査区の埋め戻しについては後続する工事の都合上行わなかった。整理・報告書作成作業は、同年3月20日より着手し、7月10日まで実施した。

第3節 調査の方法

調査区の座標は公共座標を基準に設定した。

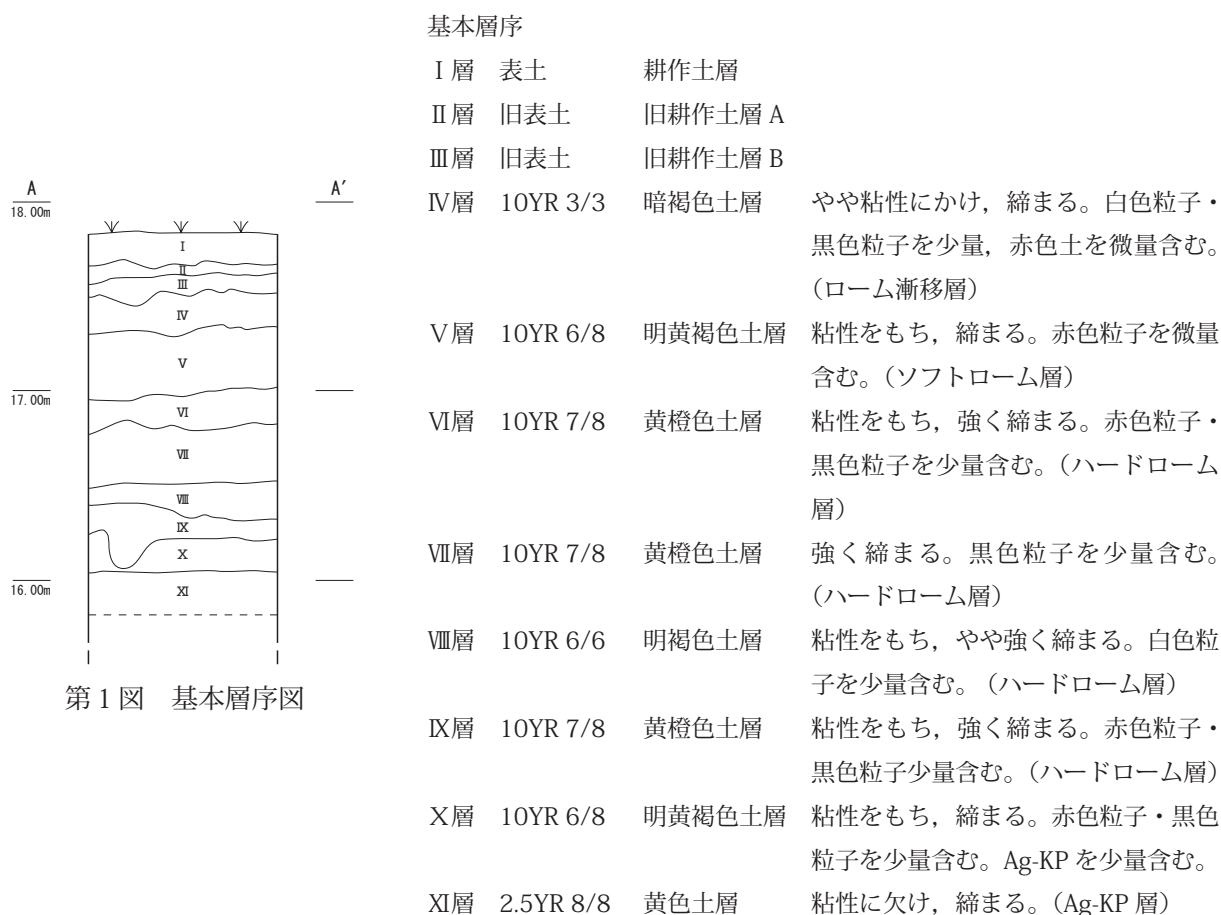
調査対象地は道路改良及び下水道工事に伴う調査であるため、南北に細長い調査区である。調査総面積は781㎡を測る。調査区内は攪乱などが調査区中央部や東側を中心に分布するが、概ね遺構の残存は良好であった。

調査にあたっては、重機を用いて表土・盛土層を除去した後は、ジョレンなどを用いて遺構確認を行った後、移植ゴテなどを用いて遺構の掘削を行っている。遺構内出土遺物については、原則として光波測量機を用いて3次元記録を実施した。また、遺構については、遺構断面については手実測、平面については光波測量機を用いて測量を行っている。写真撮影にあたっては35mmモノクロフィルム、35mmカラーリバーサルフィルム、デジタルカメラ（1,600万画素）を併用し、適宜、記録撮影を行った。

第4節 基本層序

調査区の現況は畑地で、調査区南部から北部へ緩やかな斜面地となっている。第2調査区において基本層序確認のためのテストピットを深く設け、土層観察作業を行った。

I～III層は現・旧表土である。調査区の一部において旧表土と現表土を分けることができる位置と、混在している位置がある。VI層は遺構確認面である黄橙色の軟質のローム層である。水戸市域で多く確認される今市・七本桜層はこの上面に位置すると思われるが、明確には確認されていない。



第1図 基本層序図

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

小原遺跡は、茨城県水戸市東前町 1072 - 1 ほかに所在している。

水戸市は、県のほぼ中央部に位置し、北は那珂市・東茨城郡城里町、東はひたちなか市・東茨城郡大洗町、南は東茨城郡茨城町、西は笠間市と接している。当市は、江戸時代に水戸徳川家の城下町として栄え、明治時代以降は県庁所在地として、本県の政治、経済、文化の中心地となっている。

当市の地形は、北西から南東に流れる那珂川とその支流である桜川や涸沼川によって形成された沖積低地（標高 10m 以下）と南西側の東茨城台地（洪積台地、標高 20 ～ 30m）、北西側は鶏足山塊からの丘陵地（標高 60 ～ 150m 程）、北東側の一部は那珂川左岸の那珂台地からなっている。

台地の地質は、古生代の鶏足層を基盤とし、下層から第三紀層の泥岩からなる水戸層、第四紀層の粘土や砂で構成される見和層、段丘礫層の上市層、関東ローム層の順に堆積している。また、低地部は沖積谷に河川堆積物である砂礫層が堆積し、場所によっては有機質の黒色泥や草炭類の堆積が見られる¹⁾。

第2節 歴史的環境

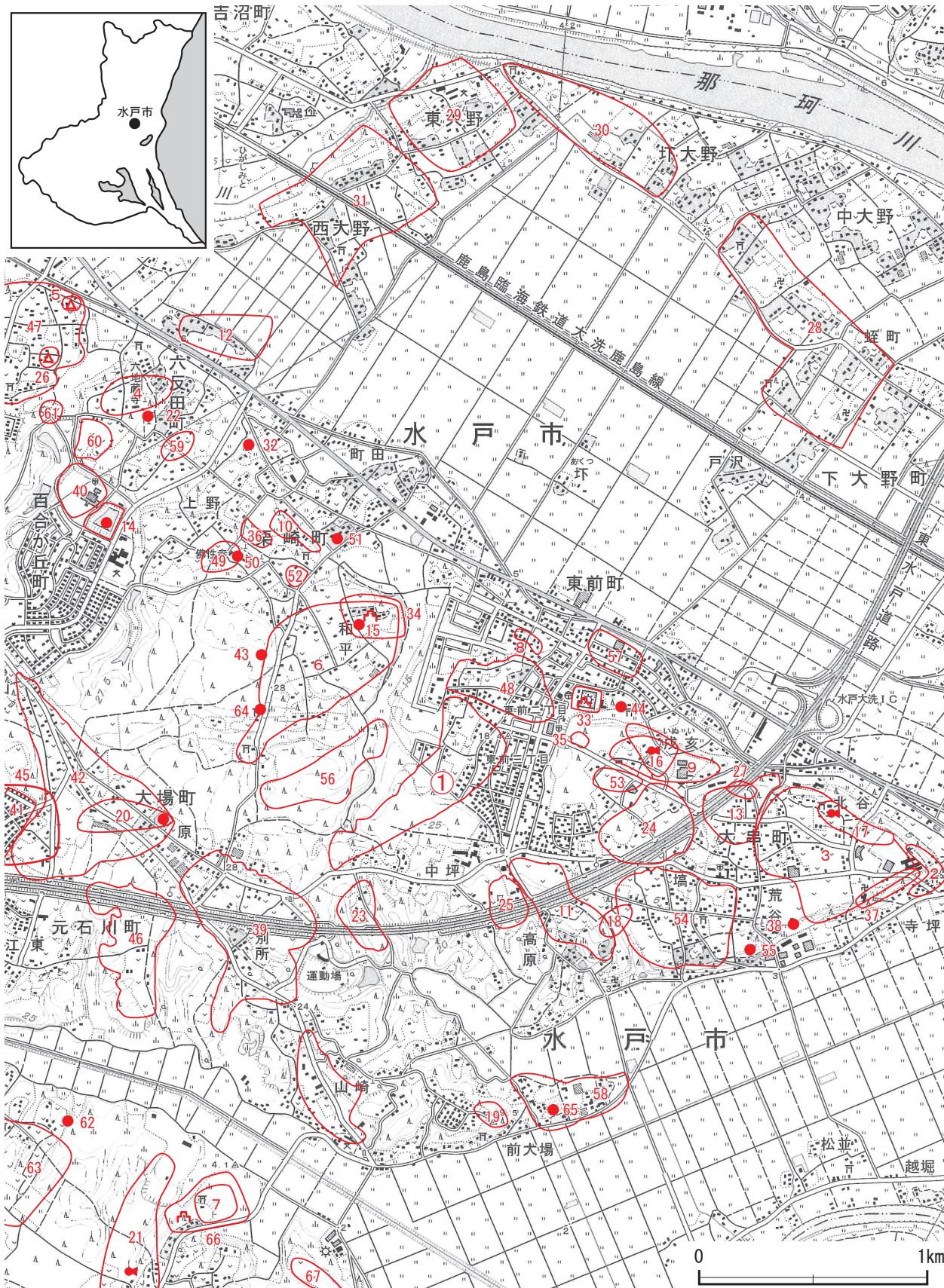
水戸市の中でも特に、本跡の所在する常澄地区は、多くの中小河川や動植物に恵まれ、素晴らしい自然環境のもとに原始・古代から多くの遺跡が確認されている。国指定遺跡である大串貝塚は、奈良時代に書かれた『常陸国風土記』²⁾に「平津ノ馭家ノ西一二里二岡アリ。名ヲ大櫛トイフ。上古二人アリ。体極メテ長大キニ身ハ丘陵ノ上二居リテ、蜃ヲ採リテ食イキ。積聚リテ岡ト成リキ。…」とあり、古代から注目されていたところである。以下、『茨城県遺跡地図』³⁾の中で報告されている水戸市常澄地区を中心に主な遺跡を時代別に概観する^{4～6)}。

旧石器時代の遺跡については、ナイフ形石器文化の前半期に位置付けられる森戸遺跡(大六天遺跡)〈7〉⁷⁾がある。

縄文時代になると、沖積低地に沿った台地縁辺部に数多くの遺跡が確認されている。特に、大串貝塚〈2〉は、大場磐雄を初め多くの研究者によって3度の発掘調査がなされている。調査の結果、多量の貝殻や獣骨、魚骨、土器が出土し、前期の貝塚であることがわかった。また、旧常澄地区の下畑遺跡では、加曽利E式、大木8b式期の竪穴住居跡をはじめとする遺構群が確認され中期から後期にかけての人々の営みを窺うことができる⁸⁾。その他、谷田貝塚〈5〉や六地藏寺遺跡〈4〉、上平遺跡〈6〉、森戸遺跡(大六天遺跡)、東前遺跡〈8〉、向山遺跡(大串殿山遺跡)〈9〉、道西遺跡〈40〉等が挙げられる。

弥生時代の遺跡は、丘陵沿いの台地上や縁辺部に見られる。東前原遺跡〈48〉では、後期の竪穴建物跡が確認されている⁹⁾。芳賀遺跡〈10〉、高原遺跡〈11〉、大道端遺跡等があるがいずれも表面採集されている。

古墳時代になると、随所に大小の集落が営まれ、多くの古墳が築造されるようになる。



第2図 小原遺跡と周辺遺跡の位置

第1表 小原遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代						
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中世	近世
①	小原遺跡			○	○	○		
2	大串貝塚		○					
3	大串遺跡		○		○	○		
4	六地藏寺遺跡			○	○	○		
5	谷田貝塚		○	○	○			
6	上平遺跡				○	○		
7	森戸遺跡(大六天遺跡)	○						
8	東前遺跡		○		○			
9	向山遺跡		○	○	○			
10	芳賀遺跡					○		
11	高原遺跡			○		○		
12	六反田広町遺跡				○			
13	北屋敷遺跡				○	○		
14	六反田古墳群				○			
15	愛宕神社古墳				○			
16	金山塚古墳群				○	○		
17	大串古墳群				○			
18	高原古墳群				○			
19	澗沼台古墳群				○			
20	小山古墳群				○			
21	森戸古墳群				○			
22	下入野古墳群				○			
23	諏訪前遺跡					○		
24	梶内遺跡				○	○		
25	沢幡遺跡					○		
26	塙坪遺跡			○		○		
27	谷田古墳群				○			
28	中大野遺跡			○	○			
29	東大野遺跡				○	○		
30	西大野A遺跡			○	○			
31	西大野B遺跡				○			
32	栗崎北古墳					○		
33	椿山館跡						○	
34	和平館跡						○	
35	大串原館跡						○	
36	伊豆屋敷跡							○
37	長福寺古墳群跡					○		
38	善徳寺古墳					○		
39	小山遺跡		○					
40	下畑遺跡		○		○			
41	雁沢遺跡		○	○	○			
42	乗越沢遺跡		○		○	○		
43	下入野西古墳群					○		
44	住吉神社古墳					○		
45	江東古墳群					○		
46	中ノ割遺跡		○			○		
47	谷田遺跡		○	○	○			
48	東前原遺跡					○	○	
49	上野遺跡						○	
50	佛性寺古墳					○		
51	フジヤマ古墳					○		
52	藤元遺跡					○		
53	大串原遺跡		○			○		
54	宮前遺跡						○	
55	東畑古墳					○		
56	打越遺跡						○	
57	上の下遺跡						○	
58	天神山遺跡					○	○	
59	新地遺跡					○	○	
60	薄内遺跡		○		○	○		
61	西谷津遺跡					○	○	

古墳は、那珂川右岸と涸沼川左岸の台地上縁辺部に小形の円墳を中心に群集している。六反田古墳群〈14〉、愛宕神社古墳〈15〉、金山塚古墳群〈16〉、大串古墳群〈17〉、高原古墳群〈18〉、涸沼台古墳群〈19〉、小山古墳群〈20〉、森戸古墳群〈21〉、下入野古墳群、長福寺古墳群（長福寺遺跡）〈37〉、下入野西古墳群等が挙げられる。

水田下から五領式土器が発見された沖積低地上の六反田広町遺跡〈12〉は、集落跡であったかは不明であるが、低地遺跡が茨城においても発見される可能性を示した遺跡である。また、北屋敷遺跡〈13〉からは、古墳時代前期の建物跡2軒と中期の建物跡1軒が確認されており、古墳と集落の関係を考えるうえで興味深いものとなっている¹⁰⁾。前期の集落として大串遺跡〈3〉が、後期の集落として竪穴建物跡8軒確認された梶内遺跡〈24〉がある。

奈良・平安時代の集落跡は、竪穴建物跡18軒が確認された向山遺跡（大串殿山遺跡）を初め、大串遺跡（塩崎原遺跡）、梶内遺跡、諏訪前遺跡〈23〉、沢幡遺跡〈25〉、高原遺跡、北屋敷遺跡等が挙げられる。向山遺跡（大串殿山遺跡）は、東茨城台地南東端の那珂川に面した台地縁辺部に立地している。向山遺跡（大串殿山遺跡）の竪穴建物跡からは、布目瓦や墨書土器が出土している。また、第14号住居跡からは、10世紀代の土師器の皿の内面に人の顔が描かれた人面墨書土器が出土している。大串遺跡では、桁行6間×梁行3間の大型掘立柱建物跡等も発見されている。掘立柱建物跡の柱抜き取り穴からは多量の炭化材とともに炭化米が、区画溝からは炭化した穎稻や穀稻が出土している。これら建物は、正倉の性格を有し、火災によって焼失したことが明らかになっている。そのほか「厨」銘墨書土器も出土している¹¹⁾。梶内遺跡では、7世紀から10世紀までの竪穴建物跡が109軒確認される。途中希薄になる時期は存在するものの、比較的長く継続する集落跡として看過することはできず、「舎人」「長」や里（郷）名を記したとみられる「芳」銘墨書土器、円面硯が出土している¹²⁾。両遺跡とも官衙関連遺跡を匂わせる。諏訪前遺跡では、8世紀と9世紀前葉の竪穴建物跡5軒が確認されている¹⁰⁾。沢幡遺跡では、9世紀前葉から10世紀前葉の竪穴建物跡14軒が確認されている。沢幡遺跡からは、「堤東」や「伍仔」等の墨書土器や陶器（愛知県猿投窯産）、鉄製品が多量に出土している¹⁰⁾。大串遺跡（塩崎原遺跡）からは、9世紀代の蔵骨器（須恵器）が2点出土しており、平安時代に当地域においても火葬の風習が入っていたことが理解できる。また、長福寺古墳群（長福寺遺跡）からは、布目瓦が採集でき、この地域に寺院か公的建物があつた可能性が考えられる。

当時代の常澄地区を見てみると、『新編常陸国誌』¹³⁾によると那賀郡芳賀里（郷）に属していたとの記載がある。那賀郡の郡衙は、「仲寺」の墨書土器や「徳輪寺」と記された文字瓦が出土した台渡里廃寺跡の近くにあつたとされている。また、那賀郡には奈良時代に平津駅家が置かれていた。平津駅家の位置は、『常陸国風土記』の「平津駅家の西12里に大串貝塚がある」との記載から現在の平戸地区が推定されている。平津は、征夷事業の為の軍需物資の補給港であり、それに連動した平津駅家も従来の駅家と性格を異にする施設があつたものと考えられている。当時は、この台地上にいくつもの集落が営まれていたものと考えられる。

中世には、常陸大掾氏の一族石川氏がこの地域一帯を開発・支配していた。当遺跡周辺に位置する椿山館跡〈33〉、和平館跡〈34〉、大串原館跡〈35〉、久保山館跡〈66〉が挙げ

られる。いずれの館跡も土塁の残存が報告されているが、調査事例が少なく詳細については不明な点が多い。

近世においては、立原伊豆守の居所と言われる伊豆屋敷跡〈36〉からは3条の土塁と1条の溝跡が確認されている¹⁴⁾。

以上のように小原遺跡〈①〉が立地する台地上には、縄文時代から近世に至るまでの豊富な遺跡が所在している。

- 1) 国土交通省 国土調査 5万分の1 都道府県土地分類基本調査(水戸)より『「地形・表層地質・土じょう 水戸 5万分の1」国土調査 経済企画庁 1969』
- 2) 「常陽藝文」編集部『常陸国風土記』1992年8月
- 3) 茨城県教育庁文化課編『茨城県遺跡地図』茨城県教育委員会 2001年
- 4) 常澄村史誌編纂委員会『常澄村史 通史編』1989年8月
- 5) 水戸市史編纂委員会『水戸市史』1963年9月
- 6) 水戸市教育委員会『水戸市埋蔵文化財分布調査報告』1984年3月
- 7) 茨城県『茨城県史料 考古資料編 先土器・縄文時代』1979年3月
- 8) 水戸市下畑遺跡発掘調査会『水戸市下畑遺跡 市道酒門8号線拡幅工事に伴う埋蔵文化財調査報告書』水戸市下畑遺跡発掘調査会 1985年
- 9) 水戸市教育委員会『東前原遺跡(第10地点) 区画道路6-33号線道路改良及び流域関連下水道工事に伴う埋蔵文化財調査報告書』水戸市埋蔵文化財報告第89集 2017年3月
- 10) 茨城県教育財団『中ノ割遺跡・小山遺跡・諏訪前遺跡・高原古墳群・沢幡遺跡・高原遺跡・北屋敷遺跡』茨城県教育財団文化財調査報告第79集 1993年3月
- 11) 水戸市教育委員会『大串遺跡(第7地点) 介護老人保健施設建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』水戸市埋蔵文化財調査報告第14集 2008年
- 12) 茨城県教育財団『梶内遺跡 一般国道6号東水戸道路改築工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』茨城県教育財団文化財調査報告第100集 1995年3月
- 13) 中山信名『新編常陸国誌』宮崎報恩会 1979年12月
- 14) 水戸地方埋蔵文化財調査研究会『伊豆屋敷跡確認調査報告 墓地造成事業に伴う埋蔵文化財有無の確認調査』水戸地方埋蔵文化財調査研究会 1998年

第3節 小原遺跡における既往の調査

当該調査の実施時点において、小原遺跡における調査は、計22地点において行われている(第3図・第2表)。

これらのうち、今般の第19地点の調査以外で遺構・遺物が確認されたのは、第3～6, 8～10, 13～14, 16～18, 20～22地点である。これらのうち、記録保存を目的とした本発掘調査に至ったのは第3・4・8・16～18・20地点の計7地点である。

第3地点からは、7世紀後半、8世紀、9世紀にかけての竪穴建物跡群のほか草堂とみられる2×2間の掘立柱建物跡が検出されており、平安時代の竪穴建物跡からは「宮」銘の墨書土器が出土している¹⁾。

第4地点からは、6世紀、7世紀後半、8世紀、9世紀にかけての竪穴建物跡群が一部重複する状態で検出されており、本地点に先行する集落跡や同時期の集落跡が広く展開している状況がうかがえる。また、9世紀代に帰属する一部の竪穴建物跡からは、第3地点で出土したものと同一「宮」のほか、「□厨」と釈読できる墨書土器も出土している。

第8地点（第2次）からは、6世紀と奈良・平安時代の竪穴建物跡やピット、土坑などが検出されるとともに、土師器・須恵器・土製支脚等が出土している。

第16地点からは、縄文時代前期の土器や石器のほか、奈良・平安時代の竪穴建物跡と近世の溝跡が検出されている。

第17地点（第2次）からは、奈良・平安時代の竪穴建物跡や、掘立柱建物跡、ピットなどが検出されるとともに、灰釉陶器や鉄製の鎌等が出土している。

第18地点からは、奈良・平安時代の竪穴建物2棟が重複する形で検出され、鉄製の紡錘車出土している。

第19地点（第2次）からは、縄文時代の陥し穴や奈良・平安時代の竪穴建物跡、掘立柱建物跡、近世の道路状遺構が検出されている。

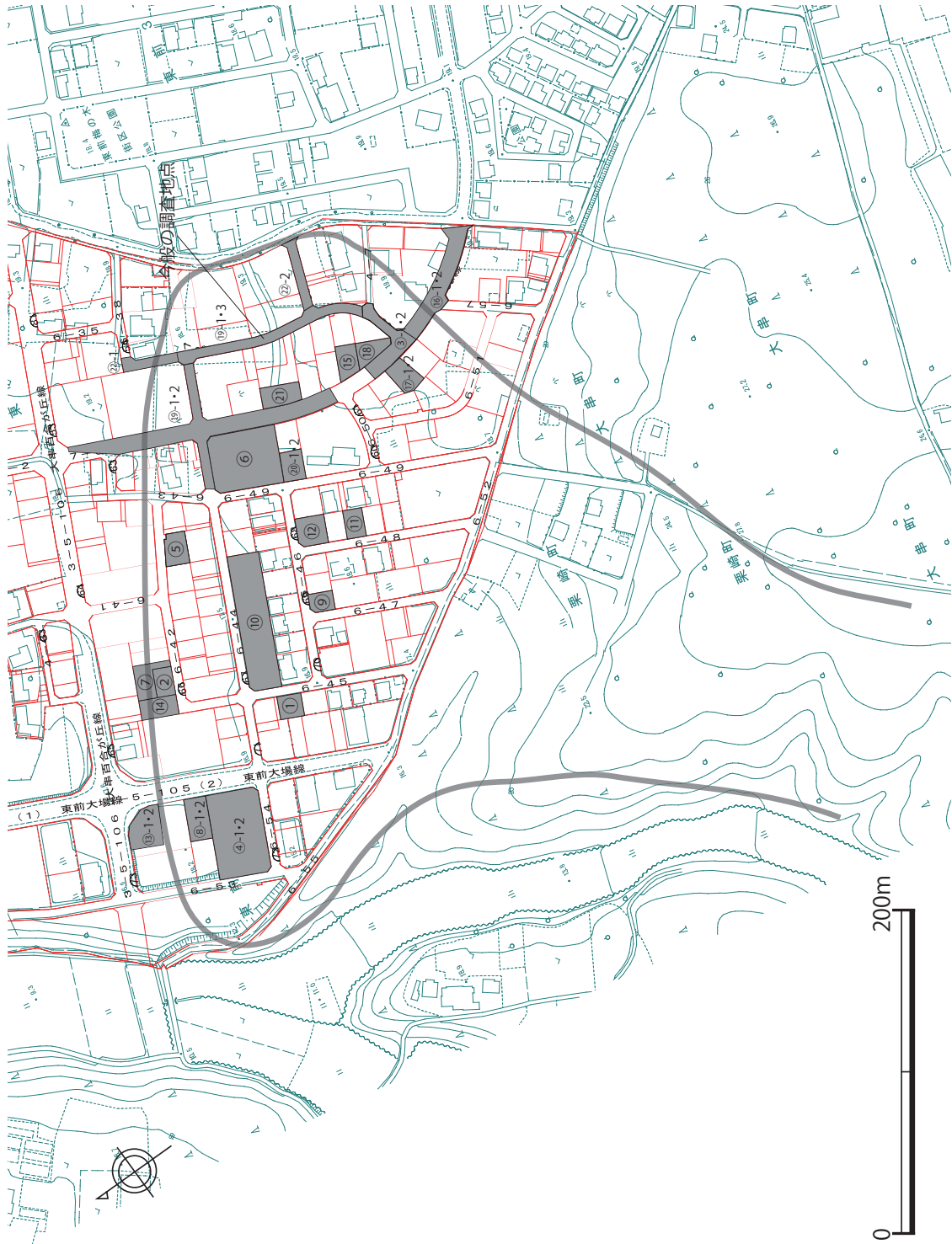
第20地点（第2次）からは、古墳時代、奈良・平安時代の竪穴建物跡と溝跡が検出されている。

以上の成果から、小原遺跡においては、古墳時代、奈良・平安時代の集落が展開しており、周辺に展開する那賀郡衙正倉別院と平津駅家の複合遺跡とみられる大串遺跡（第7地点）や官衙周辺集落とみられる梶内遺跡との関連性が想起される。

1) 水戸市教育委員会『小原遺跡（第3地点） 都計道7・6・1号他3線道路改良及び流域関連下水道工事に伴う埋蔵文化財調査報告書』水戸市埋蔵文化財報告第68集 2015年

第2表 小原遺跡における既往の調査一覧

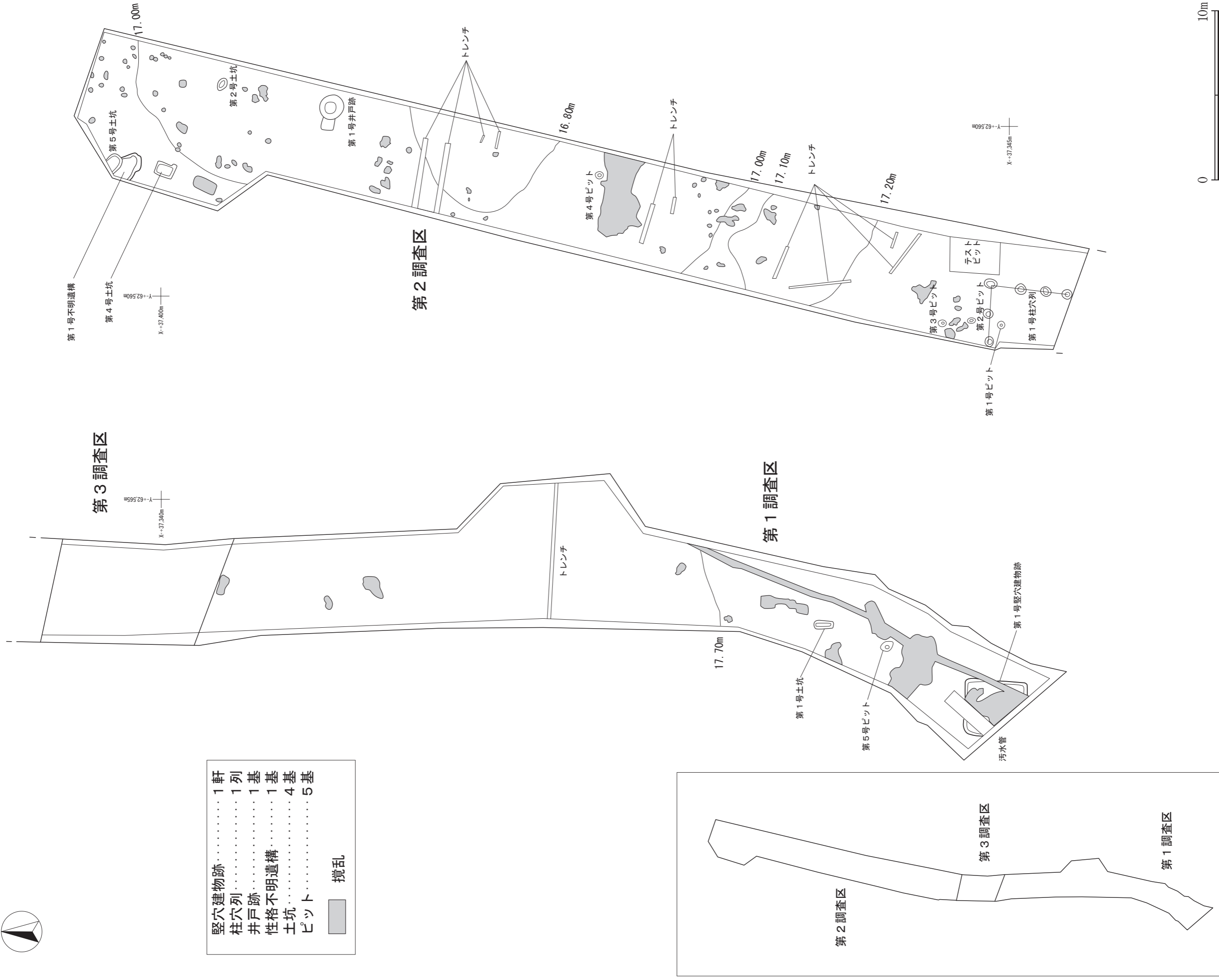
地点名	調査箇所	年度	種別	調査原因	遺構	遺物
第1地点	東前町 1049-4	H24	試	個人住宅建築	—	—
第2地点	東前町 1150-3	H26	試	個人住宅建築	—	—
第3地点	東前町 1056～1065	H26	試/本	土地区画整理事業	○	○
第4地点	東前第二区画整理地 73 街区 2・3・6	H26	試/本	個人住宅建築	○	○
第5地点	東前第二区画整理地 66 街区 20	H26	試	個人住宅建築	○	○
第6地点	東前第二区画整理地 62 街区 3・4・5	H27	試	共同住宅建築	○	○
第7地点	東前町 1150-2・4	H27	試	個人住宅建築	○	○
第8地点	東前第二区画整理地 73 街区 1・5	H28	試/本	個人住宅建築	○	○
第9地点	東前第二区画整理地 69 街区 1	H27	試	土地鑑定	○	○
第10地点	東前第二区画整理地 67 街区 1・2	H27	試	老人ホーム建築	○	○
第11地点	東前第二区画整理地 68 街区 17	H27	試	個人住宅建築	—	—
第12地点	東前町字原 1042, 1055	H27	試	賃貸住宅建築	—	—
第13地点	東前第二区画整理地 73 街区 7	H27/H31	試	個人住宅建築	○	○
第14地点	東前町 1150-1	H27	試	個人住宅建築	—	○
第15地点	東前第二土地区画整理事業保留地 56 街区 9	H27	試	個人住宅建築	—	—
第16地点	東前町 1064 の一部, 1065 の一部, 1029 - 8	H28	試/本	土地区画整理事業	○	○
第17地点	東前町 1060, 1062-1	H28	試/本	個人住宅建築	○	○
第18地点	東前町 1062-1	H28	試/本	個人住宅建築	○	○
第19地点	東前町 1038-1, 1039-1, 1060, 1064	H28	試/本	土地区画整理事業	○	○
第20地点	東前町 1055・1056 の各一部	H28	試/本	個人住宅建築	○	○
第21地点	東前町 1062-3	H28	試	個人住宅建築	○	○
第22地点	東前町	H28	試	土地区画整理事業	○	○



第3図 調査地点位置図



- 竪穴建物跡……………1軒
- 柱穴列……………1列
- 井戸跡……………1基
- 性格不明遺構……………1基
- 土坑……………4基
- ピット……………5
- 攪乱



第4図 小原遺跡遺構分布図

第3章 検出された遺構と遺物

第1節 奈良・平安時代の遺構と遺物

当遺跡において、当該期は遺構や遺物の中心となる時代であるが、今回の調査で確認された遺構は竪穴建物跡1軒のみである。また、遺物の出土も僅かであり、大半が耕作により粉砕されている。以下、検出された遺構や遺物に対する説明を加えることとする。

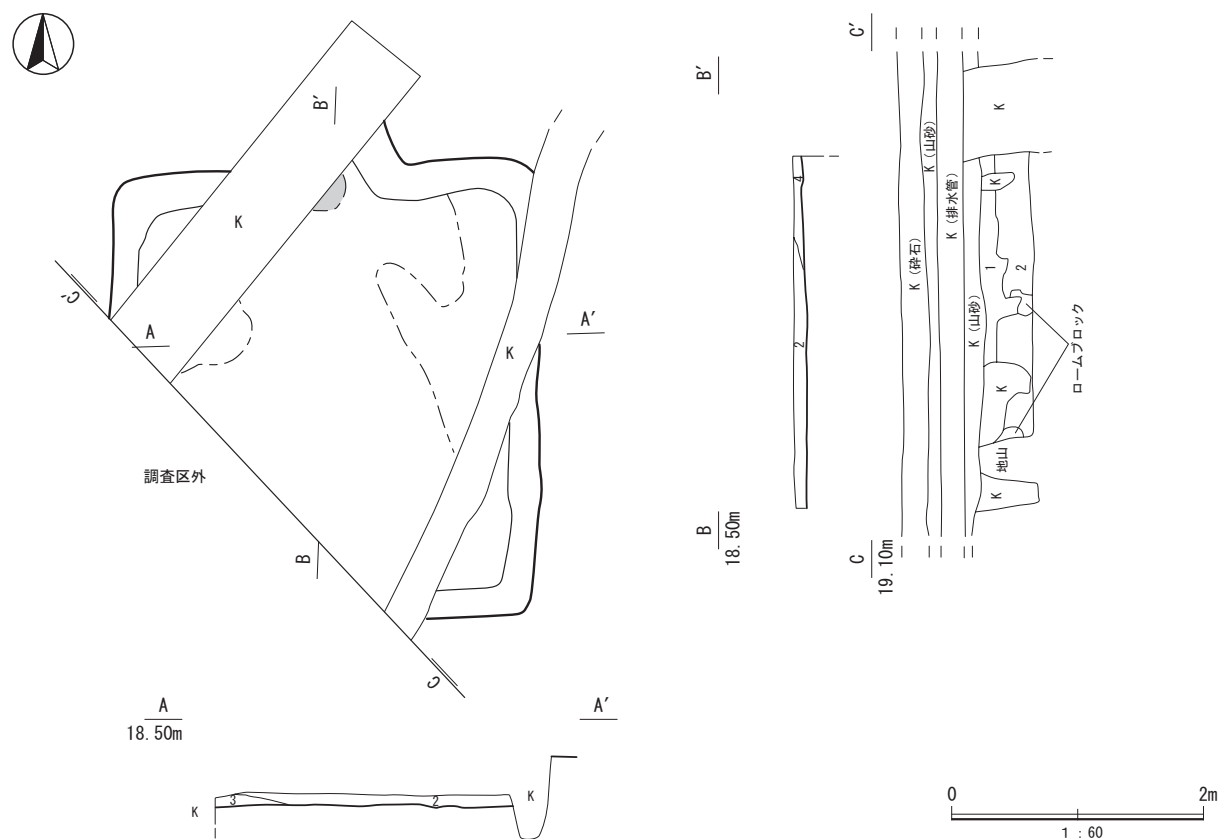
第1号竪穴建物跡

位置 第1調査区南端、標高 17.90 m地点に位置する。本跡の北西部が調査区外にあるためその部分は調査をすることができなかった。また、本跡の東部と北西部に攪乱が見られる。

規模と形状 長軸 4.10m 以上、短軸 3.40m の長方形と推定される。主軸方向は北壁および南壁を基準に $N-0^\circ$ を示すと推測される。壁高の最大高は 12cm を測り、緩やかに立ち上がる。

重複関係 単独で存在する。

土層 3層に分層され、ロームブロックを含む人為的な堆積状況を示す。なお、第3層のロームブロックは壁の崩落土であり、第4層の砂質粘土ブロックは竈の構築材である。



第5図 第1号竪穴建物跡（1）

土層解説

1. 10YR 3/3 暗褐色 ロームブロック少量, 炭化物微量, 礫少量, 締まりややあり
2. 10YR 3/4 暗褐色 ロームブロック少量, ローム粒子少量, 粘性・締まりともにややあり
3. 10YR 4/3 にぶい黄褐色 ロームブロック少量, ローム粒子微量, 礫微量, 粘性弱い
4. 10YR 4/4 褐色 ロームブロック微量, 砂質粘土少量, 礫微量, 粘性弱い

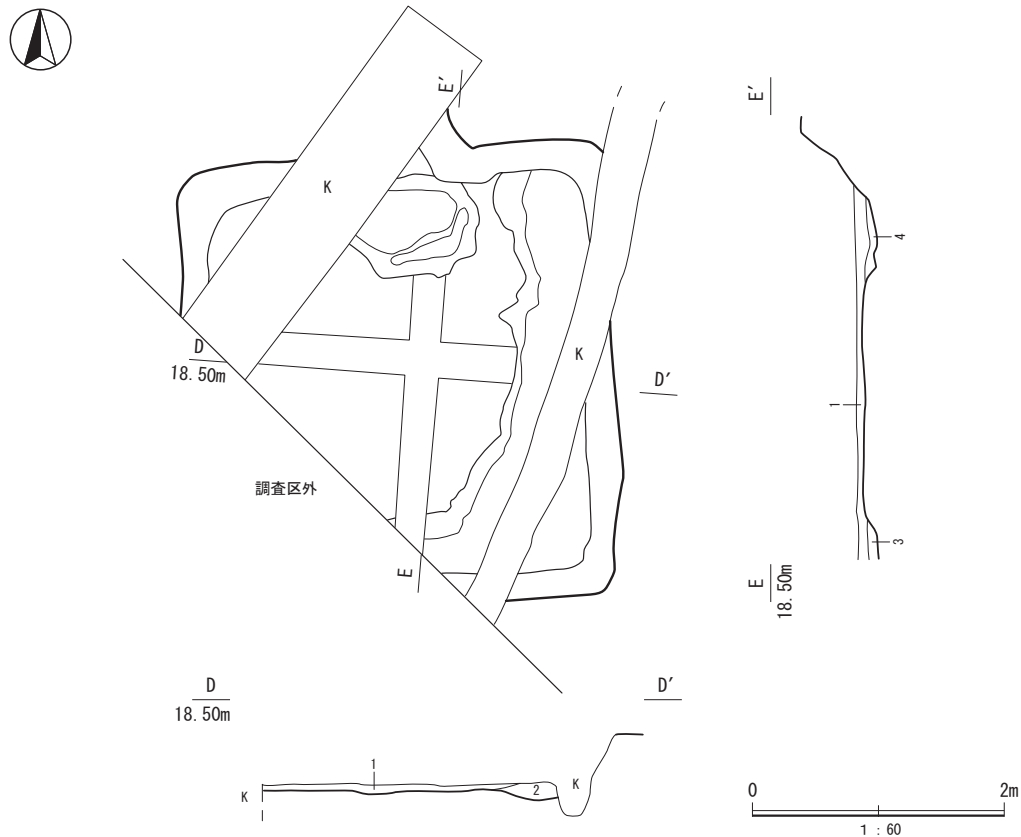
床面 明らかな貼床は存在しないが、竪穴建物を構築する段階で凹凸を均す意図でローム土が充填されたと推測され、東壁際を中心に化粧土が見受けられる。また、床面は概ね平坦であり、本跡中央部で検出された部分はよく踏み固められている。

壁溝 検出されていない。

カマド 北壁中央部を掘り込み竈が構築されているが、後世の攪乱により大半が壊されており、火床面の一部が確認されたのみである。しかし、竈から竪穴建物跡にかけての掘り方土層を観察した結果、竈は床面の構築前に構築されていることが明らかとなった。また、竈は床面レベルから15cmほど掘り込んだ後にロームブロックを主体とした褐色土で構築されている。なお、竪穴建物跡覆土中には竈構築材と推測される砂質粘土のブロックが確認され、覆土第4層が相当する。

柱穴 検出されていない。

貯蔵穴 検出されていない。



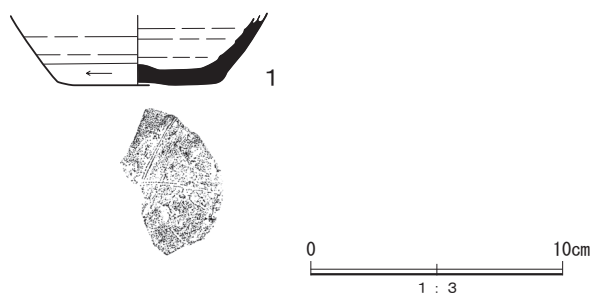
第6図 第1号竪穴建物跡(2)掘り方

掘り方 本跡東壁際や竈を中心に掘り込まれている。東壁際では厚さ 10cm から 15cm を測り、その後、ローム土が充填されている。

掘り方土層解説

1. 10YR 4/3 にぶい黄褐色 ロームブロック少量, ローム粒子少量, 締まりややあり
2. 10YR 3/4 暗褐色 ロームブロック微量, ローム粒子少量, 粘性・締まりともに弱い
3. 10YR 3/3 暗褐色 ロームブロック少量, ローム粒子微量, 礫微量, 粘性弱い
4. 10YR 3/4 暗褐色 ロームブロック微量, 粘性やや弱い

遺物出土状況 28 点, 480g の遺物が出土している。内訳は, 土師器坏類 3 点, 須恵器坏類 1 点, 甕類 24 点である。しかし図示することができた遺物は 1 点のみであり, ほかはいずれも細片である。1 は須恵器の坏で, 埋土中に混入したものと考えられる。



第 7 図 第 1 号竪穴建物跡出土遺物

第 3 表 第 1 号竪穴建物跡出土遺物属性一覧

番号	種別	機種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土	色調	特 徴	出土位置	備考
SI-1-1	須恵器	坏	—	[2.8]	(6.4)	長石・石英・ 海綿状骨針	褐灰	ロクロ整形。天井部回転ヘラ削り。底部ヘラ記号。	北東部 攪乱内	体～底部 10%, 図版 3

所見 本跡に伴う残存率が高い遺物は確認されておらず, 遺棄する段階で持ち去られていたことが想定される。また土層観察の結果, 廃絶時あるいは廃絶後間もなく埋め戻されていることが明らかとなっている。遺物が遺存していないことから, 疫病等によるため住居を遺棄したとは考え難く, また廃絶時あるいは廃絶後間もなく埋め戻されていることからみても本跡周辺に新たな竪穴建物の建て替えに伴う可能性が示唆されよう。

本跡の時期は, 本跡に伴う遺物が少なく断定しかねるが, 竪穴建物跡の形状や埋土中から出土した遺物が主に奈良・平安時代の所産であることを踏まえ, 9 世紀代と推測される。

第2節 時期不明の遺構と遺物

出土遺物がなく、また形状や土層から明確に時期を判断できない時期不明の遺構は、井戸跡1基、柱穴列1列、土坑4基、ピット5基、性格不明遺構1基である。以下、検出された遺構や遺物に対しての説明を加えることとする。

第1号井戸

位置 第2調査区北部、標高16.85m地点に位置する。

規模と形状 平面形は長軸1.46m、短軸1.44mの円形である。断面形は上端が開き、中位から窄まる漏斗状を呈し、中位からは円筒状に垂直に落ちる。下位は深さ3.2mまで掘り下げたが、安全面を考慮したうえで、完掘することを断念した。

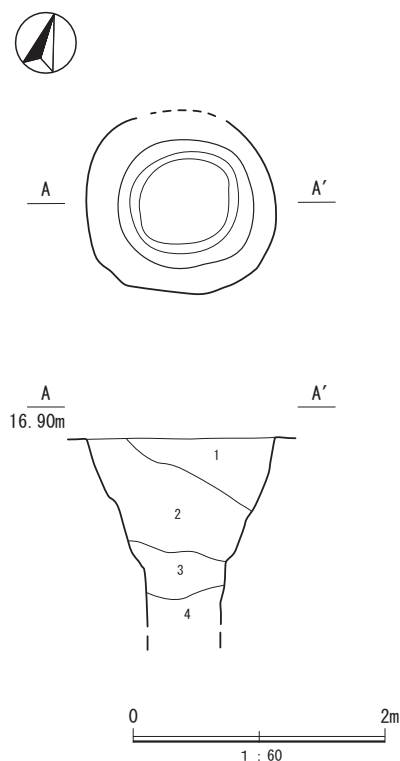
重複関係 単独で存在する。

土層 5層に分層できる。ロームブロックが混入する人為的な埋没状況を示している。

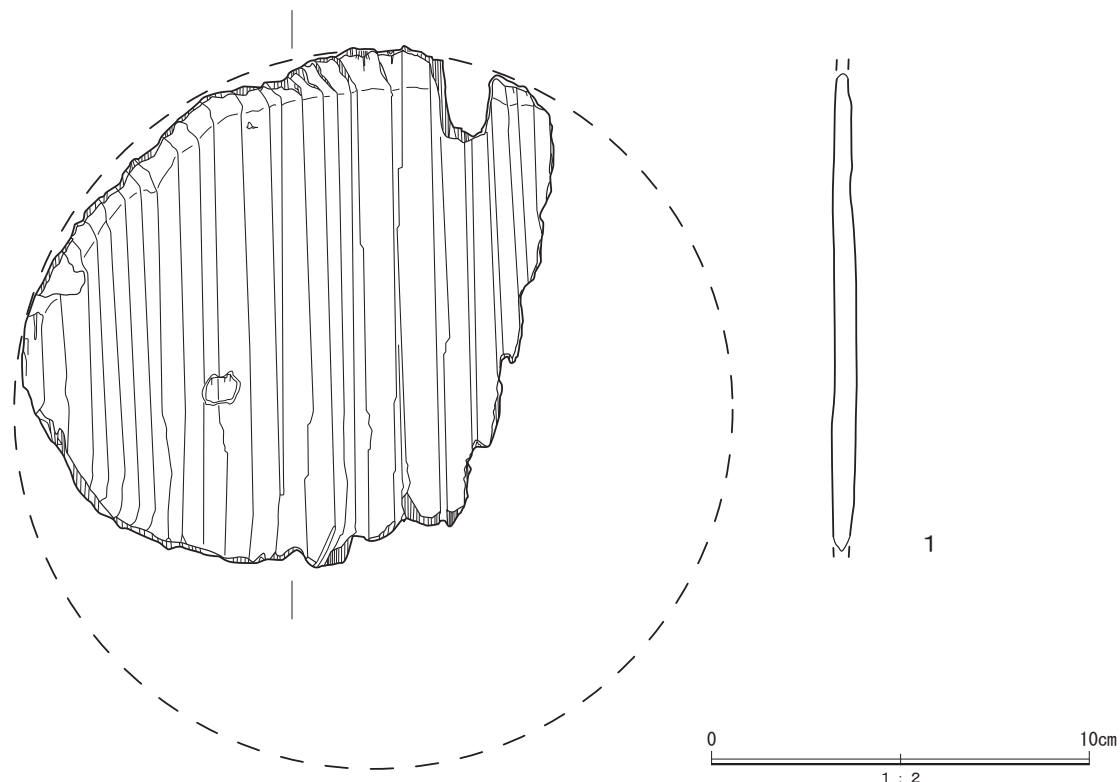
土層解説

1. 10YR 3/4 暗褐色 ロームブロック少量, ローム粒子少量
2. 10YR 3/3 暗褐色 ロームブロック微量, ローム粒子少量, 締まりややあり
3. 10YR 3/3 暗褐色 ロームブロック少量, ローム粒子微量, 締まりややあり
4. 10YR 4/3 にぶい黄褐色 ロームブロック多量, ローム粒子少量, 締まり強い
5. 10YR 4/3 にぶい黄褐色 ロームブロック少量, ローム粒子少量, 礫少量, 粘性あり

遺物出土状況 3点、122gの遺物が出土している。図示した遺物は曲げ物の底板で、ほかの2点は細片のため図化できなかったが、内訳は土師質土器細片1点、近代以降の磁器の碗が1点である。



第8図 第1号井戸跡



第9図 第1号井戸跡出土遺物

第4表 第1号井戸跡出土遺物属性一覧

番号	種別	器種	径 (cm)	厚さ (cm)	特 徴	出土位置	備考
第1号 井戸跡-1	木製品	曲物	(19.0)	0.6	底板。円形あるいは楕円形。	覆土下層	底部35%, 図版3

所見 覆土下層から曲げ物が出土したが、覆土に空き缶やビニール片が混入しており、廃絶時期は現代と考えられる。それまでは農作物への水遣り井戸として活用されていたようである。

第1号柱穴列跡

位置 第2調査区南端、標高17.20m地点に位置する。本跡の西部が調査区外にあるため、その部分は調査をすることができなかった。

規模と形状 東西列は調査区外にあるため不明であるが、南北列長4.56m、東西列長3.60mである。南北軸方向はN-0°である。調査区内では6基のピットがL字状に配列されている。柱間寸法は1.2mを基調としている。

重複関係 単独で存在する。

柱穴 6ヶ所確認され、P1は62×53cmで深さ15cm、P2は63×53cmで深さ16cm、P3は76×66cmで深さ32cm、P4は68×60cmで深さ20cm、P5は62×60cmで深さ16cm、P6は60×50cmで深さ62cmである。

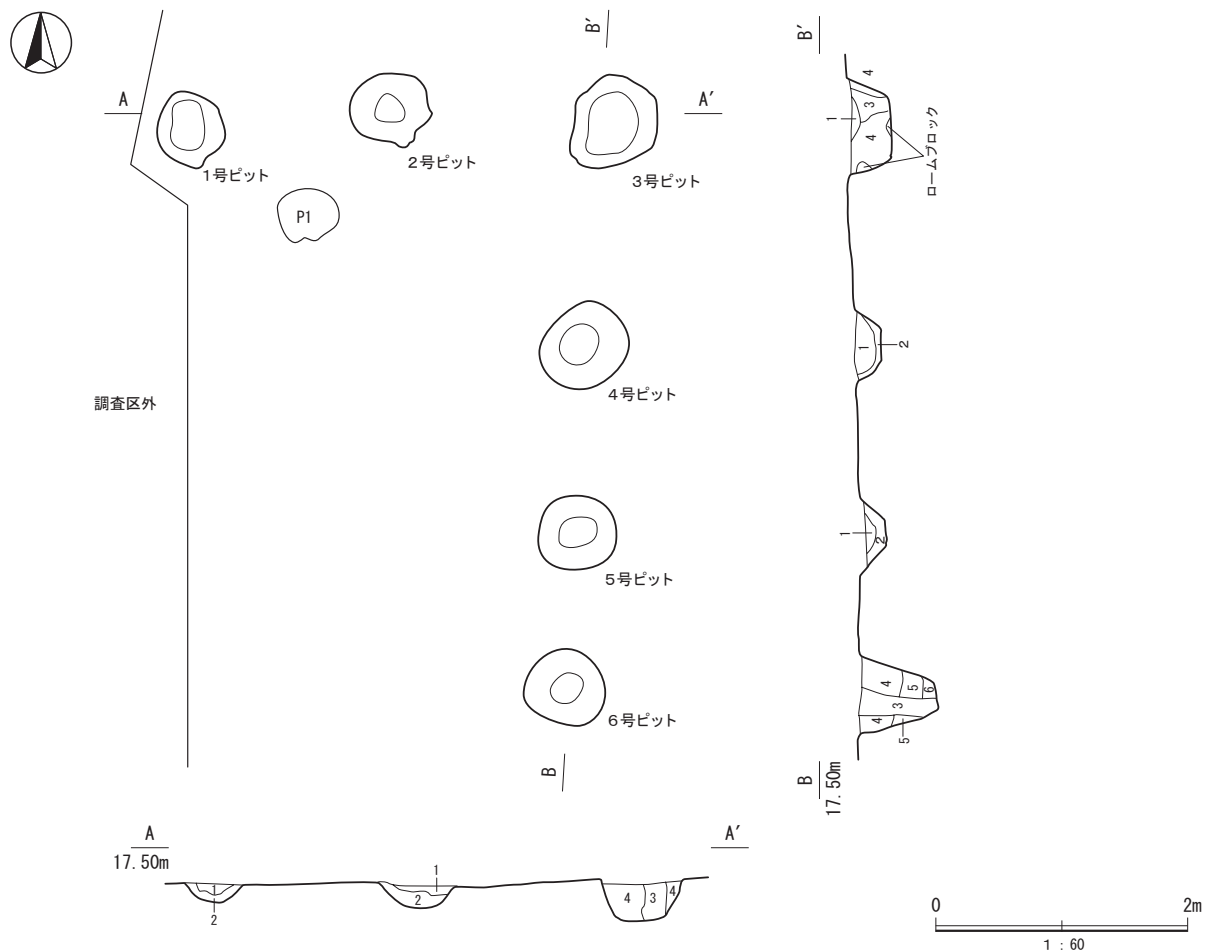
土層 ロームブロック主体である。なお、柱の抜き取り痕がP 3で、柱痕跡がP 6で確認された。

土層解説

1. 10YR 3/3 暗褐色 ロームブロック少量, ローム粒子少量
2. 10YR 3/4 暗褐色 ロームブロック微量, ローム粒子少量, 縮まりややあり
3. 10YR 3/3 暗褐色 ロームブロック少量, ローム粒子微量, 縮まり・粘性ともに弱い(柱痕跡, 柱抜き取り痕)
4. 10YR 4/4 褐色 ロームブロック中量, ローム粒子少量, 縮まり強い
5. 10YR 4/3 にぶい黄褐色 ロームブロック少量, ローム粒子少量, 縮まりややあり
6. 10YR 4/4 暗褐色 ロームブロック少量, ローム粒子少量, 礫微量, 粘性・縮まりともにややあり

遺物出土状況 1点, 12gの土師器甕片が出土している。埋土中に混入したのと考えられるが, 細片のため, 図示化することはできなかった。

所見 調査区内でL字状に並ぶ6基のピットが確認された。P3・P6の覆土には柱痕跡及び柱抜き取り痕が確認されており, これらのピットはそれぞれ柱穴であると判断した。しかし, 柱穴覆土に混入遺物と推測される土器細片1点が出土したが, 時期を特定するには至らなかった。



第10図 第1号柱穴列

第1号土坑

位置 第1調査区中央部，標高 17.50m 地点に位置する。

規模と形状 平面形は長軸 68cm，短軸 47cmの長方形で，確認面からの深さは 24cmを測り，断面形は箱状を呈する。主軸方向はN - 0°を示す。底面はやや起伏を持ち，壁面は急角度に立ち上がる。

重複関係 単独で存在する。

土層 単層で，ロームブロックを少量含む人為堆積である。

土層解説

1. 10YR 3/3 暗褐色 ロームブロック少量，ローム粒子少量，粘性なし

遺物出土状況 遺物は出土していない。

所見 性格は不明である。時期は締まりの弱い覆土の状況より近世以降の所産であろうか。

第2号土坑

位置 第2調査区中央部やや北寄り，標高 17.00m 地点に位置する。

規模と形状 平面形は長軸 85cm，短軸 58cmの不整形で，確認面からの深さは 14cmを測り，断面形は皿状を呈する。主軸方向はN - 60° - Wを示す。底面はやや起伏を持ち，壁面は緩やかに立ち上がる。

重複関係 単独で存在する。

土層 単層であるが，覆土が浅く，中央部が攪乱されているため，埋没状況は不明である。

土層解説

1. 10YR 3/4 暗褐色 ロームブロック少量，ローム粒子少量，締まり弱い

遺物出土状況 遺物は出土していない。

所見 平面形は不整形であり掘り込みも浅いため，性格も時期も把握することはできなかった。

第4号土坑

位置 第2調査区北部，標高 17.00m 地点に位置する。

規模と形状 平面形は長軸 84cm，短軸 66cmの長方形で，確認面からの深さは 22cmを測り，断面形は箱状を呈する。主軸方向はN - 25° - Eを示す。底面は平坦で，壁面は急角度に立ち上がる。

重複関係 単独で存在する。

土層 単層でロームブロックを含む人為堆積である。

土層解説

1. 10YR 3/4 暗褐色 ロームブロック中量，ローム粒子少量，締まり弱い

遺物出土状況 遺物は出土していない。

所見 覆土はロームブロック混じりのボソボソとした質感であり，所謂，芋穴と推測される。時期は締まりの弱い覆土の状況より近世以降の所産である可能性が高い。

第5号土坑

位置 第2調査区北部，標高 16.90m 地点に位置する。

規模と形状 西部が調査区外にあるため，詳細は不明であるが，平面形は長軸 94cm以上，短軸 85cmの長方形と推測される。確認面からの深さは 17cmを測り，断面形は箱状を呈する。主軸方向は $N - 60^\circ - W$ を示す。底面はやや起伏を持ち，壁面は緩やかに立ち上がる。

重複関係 性格不明遺構より新しい。

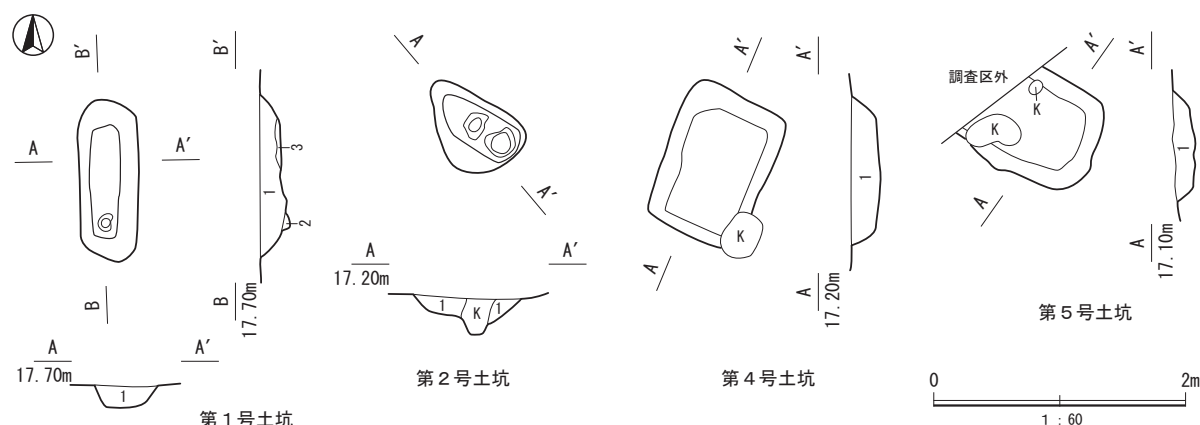
土層 単層である。ロームブロック主体の人為堆積である。

土層解説

1. 10YR 3/4 暗褐色 ロームブロック少量，ローム粒子中量，締まり弱い

遺物出土状況 遺物は出土していない。

所見 性格は不明であるが，第4号土坑同様，芋穴の可能性が高い。時期は締まりの弱い覆土の状況より近世以降の所産であろう。



第11図 第1・2・4・5土坑

第1号ピット

位置 第2調査区南部，標高 17.30m 地点に位置する。

規模と形状 平面形は長軸 48cm，短軸 36cmの不整楕円形で，確認面からの深さは 30cmを測り，断面形は箱状を呈する。

重複関係 単独で存在する。

土層 3層に分層される。ロームブロックを含む土層ではあるが、埋土かどうかは不明である。

土層解説

1. 10YR 4/3 にぶい黄褐色 ロームブロック少量, ローム粒子少量, 締まり弱い
2. 10YR 3/4 暗褐色 ロームブロック微量, ローム粒子少量, 粘性・締まりともに弱い
3. 10YR 3/3 暗褐色 ロームブロック微量, ローム粒子微量, 締まりややあり

遺物出土状況 遺物は出土していない。

所見 柱痕跡や柱抜き取り痕は確認されておらず、性格・時期ともに不明である。

第2号ピット

位置 第2調査区南部, 標高 17.30m 地点に位置する。

規模と形状 平面形は長軸 60cm, 短軸 35cmの不整楕円形で, 確認面からの深さは 23cmを測り, 断面形は箱状を呈する。

重複関係 単独で存在する。

土層 2層に分層される。ロームブロックを含む人為堆積である。

土層解説

1. 10YR 3/3 暗褐色 ロームブロック少量, 締まり弱い
2. 10YR 4/4 にぶい黄暗褐色 ロームブロック少量, ローム粒子少量, 粘性・締まりともに弱い

遺物出土状況 遺物は出土していない。

所見 柱痕跡や柱抜き取り痕は確認されておらず、性格・時期ともに不明である。

第3号ピット

位置 第2調査区南部, 標高 17.30m 地点に位置する。

規模と形状 平面形は長軸 50cm, 短軸 46cmの円形で, 確認面からの深さは 26cmを測り, 断面形は箱状を呈する。

重複関係 単独で存在する。

土層 粒子が細かく均一な単層で, 自然堆積である。

土層解説

1. 10YR 3/3 暗褐色 ローム粒子少量, 締まり弱く, 粘性ややあり

遺物出土状況 遺物は出土していない。

所見 柱痕跡や柱抜き取り痕は確認されておらず、性格・時期ともに不明である。

第4号ピット

位置 第2調査区中央部, 標高 17.00m 地点に位置する。

規模と形状 平面形は長軸 48cm, 短軸 40cmの不整円形で, 確認面からの深さは 20cmを測り, 断面形は箱状を呈する。

重複関係 単独で存在する。

土層 2層に分層される。第1層は柱抜き取り痕である。

土層解説

1. 10YR 3/3 暗褐色 ロームブロック微量，ローム粒子少量，締まり・粘性ともに弱い（柱抜き取り痕）
2. 10YR 4/4 褐色 ロームブロック中量，ローム粒子少量，締まり強い

遺物出土状況 遺物は出土していない。

所見 単独で存在するが，柱抜き取り痕が確認されており，調査区外に対となる柱穴が存在する可能性がある。時期は遺物が出土しておらず不明である。

第5号ピット

位置 第1調査区南部，標高 16.80m 地点に位置する。

規模と形状 平面形は長軸 73cm，短軸 52cmの不整円形で，確認面からの深さは 18cmを測り，断面形は皿状を呈する。

重複関係 単独で存在する。

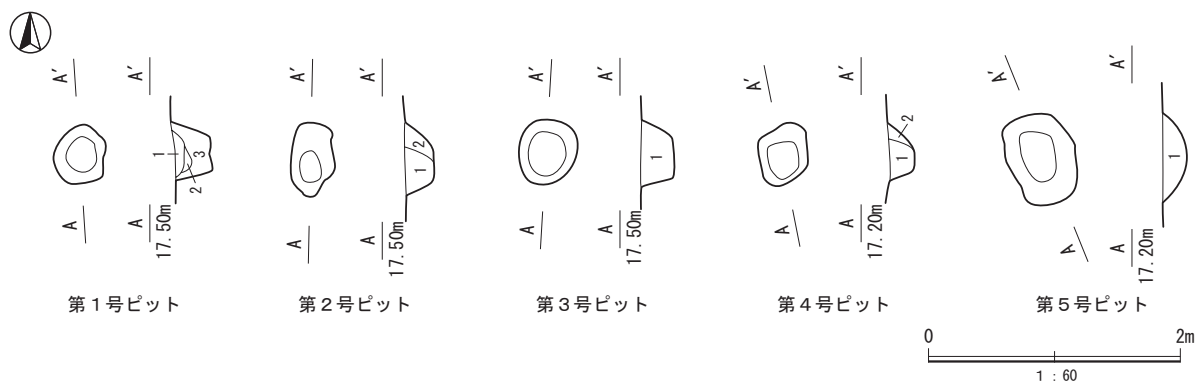
土層 単層である。

土層解説

1. 10YR 3/3 暗褐色 ロームブロック少量，ローム粒子微量，締まり弱い

遺物出土状況 遺物は出土していない。

所見 柱痕や柱抜き取り痕は確認されておらず，遺物も出土していないため，性格・時期ともに不明である。



第12図 第1～5号ピット

第1号性格不明遺構

位置 第2調査区北部，標高 17.00m 地点に位置する。

規模と形状 平面形は長軸 2.0m 以上，短軸 1.4m 以上の不整形で，確認面からの深さは 14cmを測り，断面形は箱状を呈する。主軸方向は不明だが，長軸方向は N-40°-W，を示す。底面はやや起伏を持ち，壁面は急角度に立ち上がる。

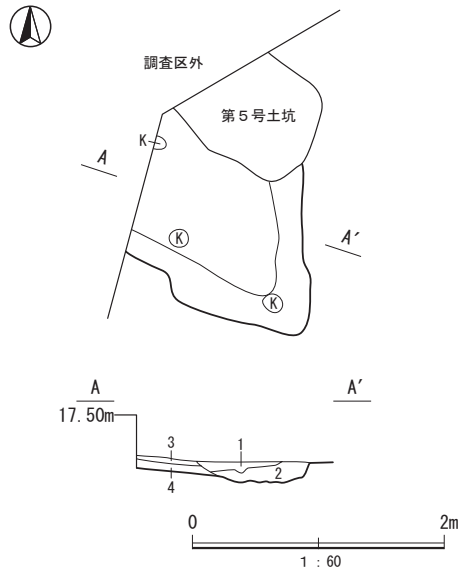
重複関係 単独で存在する。

土層 4層に分層できる。ロームブロックと炭化物や焼土を含む人為堆積である。

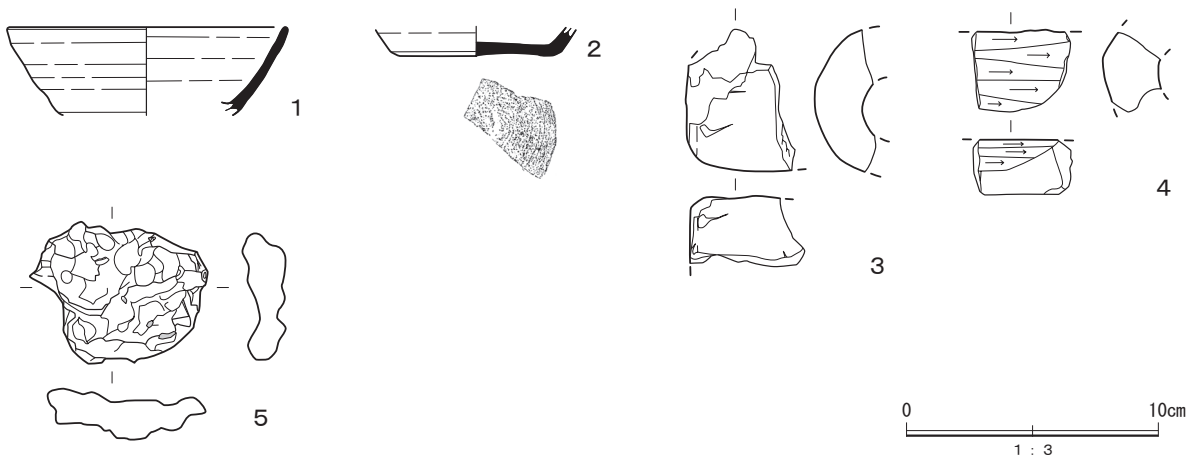
土層解説

1. 10YR 3/3 暗褐色 ロームブロック少量, ローム粒子少量, 炭化物少量, 粘性なし
2. 10YR 3/4 暗褐色 ロームブロック微量, ローム粒子少量, 炭化物中量, 焼土少量, 粘性・縮まりともに弱い
3. 10YR 3/3 暗褐色 ロームブロック微量, ローム粒子微量, 縮まりややあり
4. 10YR 3/4 暗褐色 ロームブロック微量, ローム粒子少量, 縮まりややあり

遺物出土状況 9点, 180gの遺物が出土している。内訳は, 土師器甕片1点, 須恵器坏片2点, 須恵器蓋片1点, 磁器碗片1点, 羽口3点, 鉄滓1点。1は須恵器の坏で, 埋土中に混入したものと考えられる。



第13図 第1号性格不明遺構



第14図 第1号性格不明遺構出土遺物

第5表 第1号性格不明遺構出土遺物属性一覧

番号	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土	色調	特 徴	出土位置	備考
第1号 性格不明 遺構-1	須恵器	坏	(11.0)	[3.5]	—	長石・石英	黒灰黄色	ロクロ整形。体部外面ロクロ目顕著。	第1層中	口縁～体部10%, 図版3
第1号 性格不明 遺構-2	須恵器	坏	(6.0)	[1.1]	—	長石・石英	褐灰色	底部片。ロクロ成形。外面ヘラ切り後ナデ。	第2層中	体～底部10%, 図版3

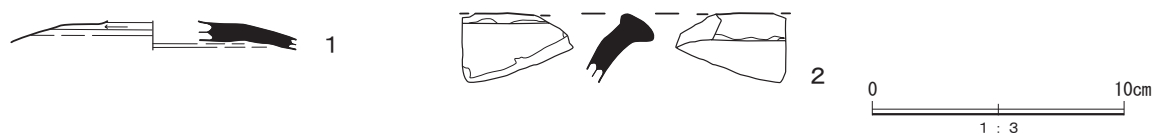
番号	種別	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	材質	色調	特 徴	出土位置	備考
第1号 性格不明 遺構-3	土製品	羽口	[4.6]	[5.6]	[2.8]	粘土・長石	外面黄灰色・内面 橙色	外面火脹れ・火垂れ顕著。	東部覆土中	図版3
第1号 性格不明 遺構-4	土製品	羽口	[3.9]	[3.2]	[2.2]	粘土・長石・ 石英・雲母	内外面黄 橙色	外面全体に一方の摺痕あり。二次焼成。	東部覆土中	図版4

番号	種別	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	特 徴	出土位置	備考
第1号 性格不明 遺構-5	鉄滓	5.6	7.0	2.0	磁力若干あり。全面赤錆。食物繊維跡	東部覆土下層	図版4

所見 調査開始時は羽口1点と須恵器片2点が確認されたため、平安時代の鍛冶関連遺構の可能性を考慮し調査を進めた。しかし、遺構覆土から鉄滓1点の他は粒状滓や鍛冶施設特有の火脹れ痕等が確認されなかったことや、遺構底部から近世後期以降と推測される磁器細片が出土したこと等から見て、廃棄土坑の可能性が高い。なお、本跡は土層観察の結果、一度掘り返しているものと推測される。時期は不明であるが、出土した磁器片の胎土からみて近世後期以降に廃絶した可能性がある。

第3節 遺構外出土遺物

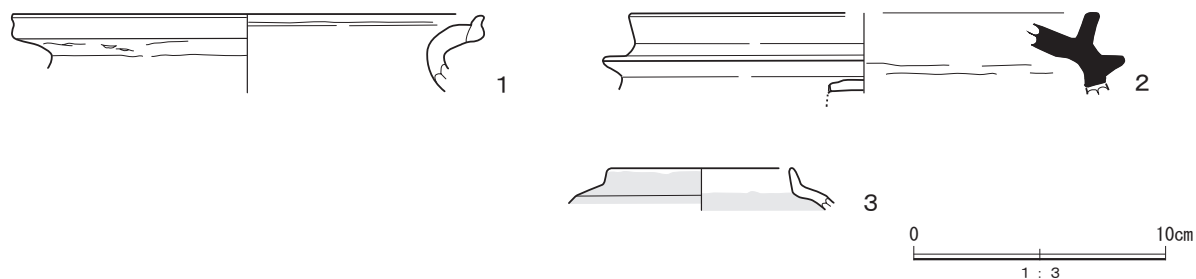
表土除去作業時に確認された遺物及び攪乱部に混入していた遺物の中で、図示できたものを記載する。



第15図 遺構外出土遺物（表採）

第6表 遺構外出土遺物（表採）属性一覧

番号	種別	機種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土	色調	特 徴	出土位置	備考
表採	須恵器	蓋	[3.8]	[1.1]	—	長石・石英	褐灰	ロクロ整形。天井部回転ヘラ削り。	第1調査区	天井～体部10%, 図版4
表採	須恵器	甕	—	[1.6]	[7.0]	長石	にぶい黄 橙色・釉 葉黒色	口縁部ヨコナデ。摩耗顕著。自然釉。	第2調査区	口縁部5%, 図版4



第16図 遺構外出土遺物（攪乱部）

第7表 遺構外出土遺物（攪乱部）属性一覧

番号	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土	色調	特 徴	出土位置	備考
攪乱部-1	土師器	甕	(18.4)	[3.0]	—	長石・石英・ 雲母	にぶい橙 色	口縁部つまみ上げ顕著。内外面ヨコナデ。	第2調査区 攪乱部	口縁部5%, 図版4
攪乱部-2	須恵器	円面碗	(18.6)	[3.2]	—	長石・石英・ 海綿状骨針	褐灰色釉・ 釉	ロクロ成形。外面自然釉。	第1調査区 攪乱部	体部5%, 木葉下窯 跡群産, 図版4
攪乱部-3	陶器	小壺	[7.0]	[1.6]	—	長石	にぶい黄 橙色・釉 葉黒色	ロクロ成形。内外面施釉（黒釉）	第2調査区 攪乱部	口縁部5%, 図版4

第8表 出土遺物集計表

時代区分		平安時代		時期不明											
遺構名		第1号 竪穴建物跡		第1号井戸		第1号柱穴列		第1号不明遺構		撓乱		表採		総計	
		数	重さ (g)	数	重さ (g)	数	重さ (g)	数	重さ (g)	数	重さ (g)	数	重さ (g)	数	重さ (g)
土師器	坏	3	45							3	22	3	19	9	86.0
	甃					1	12	1	13	34	369	12	110	48	504.0
須恵器	坏	1	32					2	16	12	130	4	21	19	199.0
	高台付坏									1	13			1	13.0
	蓋							1	12	1	11			2	23.0
	甃	24	403							7	311	1	17	32	731.0
	円面碗									1	33			1	33.0
土師質 土器	皿			1	5									1	5.0
陶器	壺									1	15			1	15.0
磁器	碗			1	10			1	14	2	11			4	35.0
土製品	羽口							3	67	9	112			12	179.0
	瓦									1	59			1	59.0
	煉瓦									1	32			1	32.0
木製品	曲物			1	107									1	107.0
礫	—									8	3600			8	3600.0
鉄滓	—							1	58	114	1801			115	1859.0
炭化物	—									1	1			1	1.0
	総計	28	480.0	3	122.0	1	12.0	9	180.0	196	6520.0	20	167.0	257	7481.0

※第1～5号土坑, 第1～5号ピットでは遺物は出土していない。(第3号土坑は欠番)

第4章 総括

当遺跡が位置する台地上に古代集落が営まれていたことは、これまでに行われた発掘調査で明確である。また、当該地周辺には、東に古代那賀郡の正倉別院と推定される大串遺跡(水戸市大串町)や律令期の交通拠点である平津駅家の想定地(水戸市平戸町)が所在し、また、西方に所在する町付遺跡(酒門町)からは、直線道路跡が確認されていることから那賀郡衙(水戸市渡里町)・大串遺跡・平津駅家を結ぶ古代の官道が当跡南側を東西方向に敷かれていたと推測されている。以上から、当該地は古代律令期の政治の一翼を担って来た地域であることが窺い知れ、官衙関連施設周辺に展開する集落であったと推測される。

本調査の成果については、時代順に所見を行い、最後に考察として今回の調査における成果等を記す。

古代

確認された遺構は竪穴建物跡1軒のみである。この第1号竪穴建物跡は攪乱を受け、竈を中心に壊された状態であったが、構築材である砂質粘土が覆土から確認されたため、竪穴建物跡と判断した。深さは60cm程で壁下に周溝はなく、覆土は意図的に埋め戻されていた。小型の建物であるが、遺構南部分が調査区外へと延びており、全体像を把握することはできなかった。時期は、出土遺物から9世紀代の所産と考えられる。

中世

遺構も遺物も確認されていない。

時期不明

今回の調査では、出土遺物がなく、明確な時期判断ができなかったが、複数の遺構が確認された。

第1号井戸跡は、径約1.50mの円形で柱状に掘り込まれ、深度は3.20mを測る。底面から曲げ物が出土したが、覆土に空き缶やビニール片が混入しており、廃絶時期は現代と考えられる。なお、当調査区は耕作地であり、農作物への水遣り井戸であったと考えられる。

第1号性格不明遺構は、遺構底面の一部に粘土ブロックが確認されたことや、遺構東部下層で鉄滓が出土していること等から、鍛冶関連施設の可能性を踏まえ調査を行ったが、柱穴等の付属施設を確認することはできず、また、遺構底部から近世後期以降と推測される磁器細片が確認されたため、遺構の性格を断定するには至らなかった。時期は、出土した磁器片の胎土からみて近世後期以降と判断した。

第1号柱穴列跡は柱穴6基で構成されているが、調査区東側へ延びる可能性も想定される。また、柱穴間尺は1.6～1.8mで、柱穴平面形はほぼ円形である。柱穴列がL字状であることから、掘立柱建物を構成する可能性を残すが、調査区の制約上確認できないため

柱穴列とした。柱穴覆土に混入遺物と推測される土器細片1点が出土したが、時期を特定するには至らなかった。

土坑は遺物の出土がないため性格や時期を特定することはできなかったが、第4・5号土坑は形状と覆土の状態から芋穴と推測される。

当遺跡は官衙関連施設周辺に展開する集落として捉えられるが、今回の調査で確認された竪穴建物跡は1軒のみである。攪乱部ではあるが、同じ調査区内から須恵器円面硯が出土しており、このことを裏付けることができる。また、この調査結果は、古代の集落跡の空白エリアを示すと言える。また、西側に隣接する前回の調査区でも集落の空白エリアは確認されており、集落内の景観を知る上でこれらの空白エリアをどう捉えるかが今後の課題となろう。しかし、今のところ決定的な確証は得られておらず、今後の調査が待たれるところである。

なお、今回の調査区では中世の遺構や遺物は確認されていないものの、明確な時期は不明であるが、構築時期が近世後期以降の井戸跡や性格不明遺構などが確認されている。また、わずかではあるが、遺構覆土中や攪乱部から明治時代から昭和時代初期にかけての陶磁器類の破片が採取されている。これらの陶磁器類はすべて細片であるが、これらの破片は大量生産された日常雑器である。以上から、今回の調査において、確認された遺構や遺物は少ないものの、当集落の近世以降における農村集落の痕跡が垣間見られたと言えよう。

【参考・引用文献】

- ・小野麻人・米川暢敬 2016 『東前原遺跡（第8地点第4次）区画道路6-27号線道路改良及び造成並びに流域関連下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』水戸市埋蔵文化財調査報告第83集 水戸市教育委員会
- ・斎藤洋・米川暢敬 2017 『小原遺跡（第16地点）都市計画道路7・6・1号線道路改良及び流域関連下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』水戸市埋蔵文化財調査報告第86集 水戸市教育委員会
- ・高野浩之・米川暢敬 2016 『東前原遺跡（第7地点第2次）区画道路10-2号線道路改良（その3）及び流域関連下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』水戸市埋蔵文化財調査報告第81集 水戸市教育委員会
- ・高野浩之・米川暢敬 2016 『東前原遺跡（第8地点第3次）区画道路10-2号線道路改良（その1）及び流域関連下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』水戸市埋蔵文化財調査報告第82集 水戸市教育委員会
- ・常澄村史編さん委員会編 1989 『常澄村史』常澄村
- ・中山信名 1979 『新編常陸国誌』宮崎報恩会

写 真 图 版



第1号竖穴建物跡完掘状況（南方向から）



第1号竖穴建物跡掘方完掘状況（南方向から）



第1号竖穴建物跡土層断面（北方向から）



第1号柱穴列完掘状況（北方向から）



第1号柱穴列遺構確認状況（北方向から）



第1号柱穴列P3土層断面（東方向から）



第1号柱穴列P6土層断面（北方向から）



第1号井戸跡完掘状況（北方向から）

図版 2



第1号井戸跡遺構確認状況（西方向から）



第1号性格不明遺構・第5号土坑完掘状況（東方向から）



第1号土坑完掘状況（南方向から）



第2号土坑完掘状況（北東方向から）



第4号土坑完掘状況（南東方向から）



第1・3調査区土層断面（北東方向から）



第2調査区土層断面（北西方向から）



テストピット土層断面（南東方向から）



第 1 号竖穴建物跡出土遺物 No.1 (須恵器坏)



第 1 号性格不明遺構出土遺物 No.1 (須恵器坏)



第 1 号性格不明遺構出土遺物 No.2 (須恵器坏)



第 1 号性格不明遺構出土遺物 No.3 (羽口)



第 1 号井戸跡出土遺物 No.1 (曲物)

図版 4



第 1 号性格不明遺構出土遺物 No.4 (羽口)



第 1 号性格不明遺構出土遺物 No.5 (鉄滓)



表採遺物 No.1 (須恵器蓋)



表採遺物 No.2 (須恵器甕)



攪乱部出土遺物 No.1 (土師器甕)



攪乱部出土遺物 No.3 (陶器小壺)



攪乱部出土遺物 No.2 (須恵器円面硯)



報告書抄録

ふりがな	こはらいせき（だいじゅうくちてんだいさんじ）							
書名	小原遺跡（第19地点第3次）							
副書名	区画道路6－39号線道路改良及び流域関連下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	水戸市埋蔵文化財調査報告第92集							
編集著者	米川暢敬・宮田和男							
著作者	米川暢敬・宮田和男							
編集機関	水戸市教育委員会							
所在地	〒310-8610 茨城県水戸市中央1-4-1 ☎029-224-1111							
発行年月日	2017（平成29）年7月10日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 。' "	東経 。' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡 番号					
こはらいせき 小原遺跡	みとしとうまえちよう 水戸市東前町1072-1 外3筆	201	183	36° 20' 16"	140° 31' 37"	2019.1.30 ～ 2019.03.18	781㎡	道路改良 及び下水道 工事に 伴う工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
小原遺跡	集落跡	平安時代	竪穴建物跡1軒		土師器 (坏・甕) 須恵器 (坏・蓋・甕・ 円面硯)	古代の竪穴建物跡の 検出は第1号竪穴建 物跡のみであるが、 これまでの調査と併 せ、官衙関連施設周 辺に展開する集落で あったと推測され る。また、表土層か ら近世後期から昭和 時代初期にかけての 陶磁器類の破片が採 取されており、井戸 跡の検出等も含め、 当集落の近世以降に おける農村集落の痕 跡が垣間見られた。		
		時期不明	井戸跡1基 性格不明遺構1基 柱穴列1列 土坑4基 ピット5基		木製品 (曲物) 陶器 (小壺) 磁器 (碗)			

項目	遺物の取り扱い
水洗い	・すべて行った。
注記	・手書きによる。例) 201183-22SK01-P1のように注記した。
接合	・接合は必要に応じて最小限行った。
実測	・遺物実測図は報告書掲載分についてのみ作成した。
台帳	・遺物台帳、図面台帳、写真台帳があり、検索が可能なように作成している。
遺物保管方法	・出土遺物は、報告書使用と未使用に分け、収納箱に納めた。各箱には収納内容を明記している。

水戸市埋蔵文化財調査報告第92集
小原遺跡（第19地点第3次）

— 区画道路6-39号線道路改良及び流域関連下水道
工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

発行日 平成29年7月10日

発行 水戸市教育委員会
〒310-8610 茨城県水戸市中央1丁目4番1号
TEL 029-224-1111
編集 関東文化財振興会株式会社
〒308-0846 茨城県筑西市布川1012
TEL 0296-28-7737
印刷 山三印刷株式会社
〒311-4153 茨城県水戸市河和田町4433-33
TEL 029-252-8481